

あとがき

第13回の研究会、まず、会場探しに手こずった。弱小放浪研究会の割には、全国から参集頂いていることもあり、アクセスや環境、肝腎の予算など、すべてが問題になる。世話人が知恵やコネをだしあい各方面に打診したが、なかなか折り合う会場がなかった。ぎりぎりになり、東京医療福祉専門学校の協力を仰ぐことができた(御礼申し上げます)。会場のアクセスは良かったが、肝腎の「ガバナンス」というメインテーマが「鍼灸」とあまり馴染みがなく、とてもコア(レア)で分かりにくくなった感がある。

しかし、である。

現代日本の直面する重要課題、「社会保障問題」はガバメントのガバナンス問題であり、その如何が将来に大きく影響する。社会保障問題は国民悉皆事項であり、我々鍼灸師は医療や社会保険の当事者でもある。2025年問題を踏まえた超高齢化施策「地域包括ケアシステム」に、あはきがどのように関わっていくのか。現状を鑑みると、高齢者を中心にした医療、福祉及び介護などが行政の調整の下、縦横に連携していく方向性に、あはきは蚊帳の外に置かれている印象がある。この実状はまさに、本邦における、あはきの社会的位置が投影されているようではない。この投影象が日本の鍼灸の実像の一部であることは、本研究会の実績をみれば明らかである。だから、過去の検証や未来を含め、我々のガバナンスをテーマにしたいと考えた。

テーマや主題の選択、講演や演題の方式、ディスカッションの在り方も毎年、議論になる。答えを探すことが目的はなく、鍼灸の社会的「事実・事象・研究」を「考察・検証」することを趣旨に立ち上げた研究会である。学会のように講演やパネルディスカッションを一方的に聞くのではなく、主体的で双方向に議論して考えることを目的に、今年は研究テーマに沿ってラウンドテーブル式にディスカッションすることをメインに考えた。その成果はいかがだったか? 存在、継続することに意義があるとはいえ、コペルニクスの転換やレジュームの変化、大論争が興るわけでもなく、ただ、淡々にディスカッションし論文を書くことに、一体、意味はあるのかと虚しさに見舞われることもある。

気を取り直して

特に今年、第一日目の若手研究者による報告は質も高く、メインテーマの「ガバナンス」問題に直結する内容が功を奏していた。若手研究者らはこれまで、全日本鍼灸学会などでも発表してきたが、やはり何か物足りなさを感じ、本研究での発表やディスカッションに手応えを感じているようだった。本研究会がこれまでの積み上げてきた実績や存在意義が少し感じられた次第であった。

東洋鍼灸専門学校の菊池貴子氏が世話人の仲間入りをした。また、世話人会からの呼びかけに対して、次世代はりきゅうレボリューションズの白石哲也氏、京都仏眼理療鍼灸専門学校の舟木宏直氏が名乗りを上げてくれた。若手の白石氏によれば、社会学的な話題や研究に興味を示す若い鍼灸師が少なからずいると、意外な情報を得ることもできた。世話人会の小さな発展が一番の収穫だったかも知れない。

平成最後の師走、茜色の夕日に 箕輪政博